

東京日々新聞

八百八十五号



このハハの昔、洗濯あらぬ仙臺よりつぎつぎとやらまの産の子産でもありや
をてつ、命と薬とありて其まの近所にはり住む狸婆アがころころと
此翁さんへ狸汁一をの喰むる居膳中、竟あら耻と柿のこぼと知らぬ敷手を握り飯下
損得ふこと切確

震亭乙湖述

夫らチヨツと御指と
なね枯木と花と咲せよ
灰あらねも本妻のびんどん焚アの
目ふ入り、あふら齒かほろちく山
脊中の紫屋と胸と胸、善報唱の幸らさ
目よあふると、この番園子と日本一の趣向と
老へは供とする現在の娘の心へ鬼を納戸の
岩屋へ思ひ入り、起んとせよとふると、重いの
着るる白をまゝ尻とのせり動るせり
其間ふ、何處へやらかこせよと、ははこ
夜看とまのけ、隠之菱の毛引じり
見打打出空物手ふ入たりと、笑栗の、
極み作りの木太刀と、洞の鼻まで押
込でどろり、敵と仕とめらる、夫ふて
しらやまのさこの、豆馬鹿
一さ斬ちらゆや



一葉齋芳樂

人形 具足屋

渡辺彫笑

